

2つの焚口の謎 —— 窯焼き

木立 つぎは、三角窯の焼き方について、お話ができれば、と思います。

清水 思いのほか、手こずりましたね。屋根と煙突があったかどうか、わからない、焚口も完全にはわからない、という状態で。ロストルといって、空気を供給しながら焚く方法があるんですが、それもやっていたかどうか、わからない。なので、その状態でどこまでできるかやってみたんですが、それでは木が完全に燃えない、という状況に陥ってしまった。

明主 焚口が2つあるので、その使い方をどうするかがむずかしくて。炎が煙突に抜けるようにしたかったんですが、焚口から炎が返って来たので、片方の焚口に木蓋をして、その反対側から焚く、という方法も試してみました。いろいろやってみたなかで、やり方によっては、煙突がなくても、できなくはないんじゃないか、というのは、終わってからずっと考えていますね。

綿引 煙突を立てるっていうのは、僕らは一番に思いつくことなんですよね。なので、それをするのは、最後の最後まで渋っていました。薪の種類がちがってもあったと思うんですけど、それよりも、焚口が2つある謎を解明して行けば、温度

がずっと上がって行くようになると思うんですけどね。

木立 なんで2つあるんですかね？実験をやってみて、邪魔で邪魔でしょうがない感じがしたんですが、どうでしたか？

清水 邪魔とは思ってないですけど(笑)。不思議やな、でもこのほうが効率の良い何かがあったんだろうな、と。

木立 今回は片方の焚口から、炎が逃げて行きましたよね。どうすれば良かったんでしょうか？

清水 鉄板の蓋があったら良かったんですけど(笑)。あれば、片方ずつ塞いで交互に焚いて、効率よく行けたと思います。

木立 でも、それをしても、オキがどんどん溜まって行きましたよね。

清水 それは、蓋が木だったから。それがうまく燃えなかったので、薪がオキになりきらずに溜まって、塞いでしまったので、この焼き方はやめました。でも、煙突があれば、きれいに燃えたと思いますよ。

木立 考古学の発掘現場で陶芸家の方と話をしていると、こんなことはありえへん、現代陶芸の知識からすれば、合理的ではない、と。私たちも、現場で間違ったことを教えられていたかもしれません。皆さんは、考古学の研究者以上に、でき

るだけ厳密にしようとするんですね。

清水 それは先生の目が怖いからです、厳しく厳密にみてくださる感じで(笑)。

木立 皆さんが、昔の陶芸家とちがって、原初的な物づくりに近づこうとしているような印象がしました。もうひとつ質問なんですけど、焚口と煙道の大きさは、あれで良かったですか？

明主 最初は、(焚口は)大きすぎたかなと思ったんですけど、焼き方によっては、あの大きさがベストかな、と感じられるように変わって行くと思います。

清水 丸太を突っ込んでたと思うと、あれくらい大ききでいいんじゃないかと思えます。そういう形で焚いている友達がいて、一回これで試してみたいなど。焚口の大きさに対して、煙道の口とのバランスが悪いかな、と窯をつくったときから内心思ったりしてたんですけど。

木立 また課題が増えましたね。木蓋で交互に焚く方法はどうでしたか？

明主 焚口が2つあるメリット性を考えるきっかけにはなったと思えました。

木立 オキを溜める場所がありませんでしたよね。窯詰めの仕方がまずかったんでしょうか？

清水 あれは再現のとおりにはやっつもりだったんですけど。騎馬ヶ谷の図だと、もうちょっと焚口と焚口の間に薪を入れられそうなスペースがありそうだなと思えました。

木立 今回は前山3号をモデルに窯をつくったんですけど、考古学の側も発掘データを見比べてみて、どこまで作品を詰めていたのか、燃やす場所をどこまで確保していたのか、出さないといけないと思えました。最後に、亀岡は窯跡がたくさんあることも知られていないんですが、良い陶芸家の方もたくさんいるということも知られていない。焼き物を焼くには、すごく良い場所だと思います。そういうことも、知ってほしいですね。



しみず しろう | 1979年京都市生まれ。京都精華大学卒業。土にこだわり、京都でみずから土を掘って、自作の炭窯で焼く、焼き物とは何かを知るために。



わたひき こうへい | 1982年三重県生まれ。京都精華大学卒業。京都市立芸術大学大学院修了。造形教室「こどもアトリエでてくてく」で指導する傍ら、器づくりやワークショップを開催。



みよし しゅう わたる | 1990年亀岡市生まれ。京都精華大学卒業。亀岡で工房を借りて独立する。2014年、小林航から明主航に作家名を改める。



きやち まさあき | 立命館大学文学部教授。専門分野は窯業考古学。窯跡研究会会長。発掘現場と陶芸家を結びつけるなど、考古学の成果を社会還元する活動を継続している。



アーティスト・トーク「かめおかの土と焼き物を巡るおはなし」は、第62回企画展「亀岡の土から生まれた ～響きあう造形美～」の関連事業として、(一財)京都陶磁器協会の助成を受けて開催しました。また、このトークでは、高橋照彦さんと石井清司さんにもお話を伺いましたが、紙幅の都合上、割愛してトークの内容の一部を抜粋し収録しています。